

## 横穴式石室内に2基の陶棺を発見

くわやまみなみ  
桑山南古墳群

たかお  
津山市高尾

平成30年1月から一般国道53号（津山南道路）改築工事に伴い、桑山南古墳群ほかの発掘調査を実施しています。周辺には、170基を超える古墳から構成される佐良山古墳群が分布しており、桑山南古墳群もその一部に含まれます。桑山南古墳群は4基の古墳からなり、いずれも6世紀から7世紀にかけて築かれた円墳と考えられます。



1号墳の横穴式石室内に納められた2基の陶棺（南東から）



1号墳石室奥の状況（北東から）



現地説明会（2号墳、東から）



2号墳の竪穴式石室（西から）

1号墳は直径約15mの円墳で、南東方向に開口する横穴式石室をもっています。石室内には2基の陶棺とうかんが残っており、入口側に置かれた陶棺の中からは鉄刀1振てつとうや練玉ねりだま（土製の玉）などが出土しました。棺外からは約80個体の土器のほか、鉄鏃てつさく（やじり）約10本、馬具の一部、弓の飾り金具などが出土し、豊富な副葬品の内容がうかがえます。1号墳は6世紀末頃に築かれ、7世紀前半頃まで追葬がなされたようです。

2号墳は直径10m弱の円墳で、ほぼ中央におおむね東西方向を向く小さな竪穴式石室があります。石室の床には円礫えんれきを敷き詰めており、須恵器すえきや鉄鏃てつさく、刀子（小刀）、水晶製切子玉きりこだまが出土しました。また、古墳の頂部や周辺からは埴輪はにわや装飾須恵器の破片が出土しており、墳丘上に立て飾られていたものと思われる。2号墳は1号墳よりやや古く、6世紀中葉から後半にかけてつくられた古墳です。

3号墳は未調査ですが横穴式石室をもっており、4号墳は大部分が調査対象地外にあるため詳細不明です。

また、1号墳の南側では、箱式石棺墓1基と土坑墓3基を検出しました。2号墳に近い時期のもので、墳丘をもつ古墳には葬られなかった、より低い階層の人たちの墓でしょう。少数の須恵器や刀子を副葬していました。

これらの調査成果を広く公開するため、6月26日・27日には現地説明会を開催したところ、両日合わせて約180名の参加者がありました。（尾上元規）



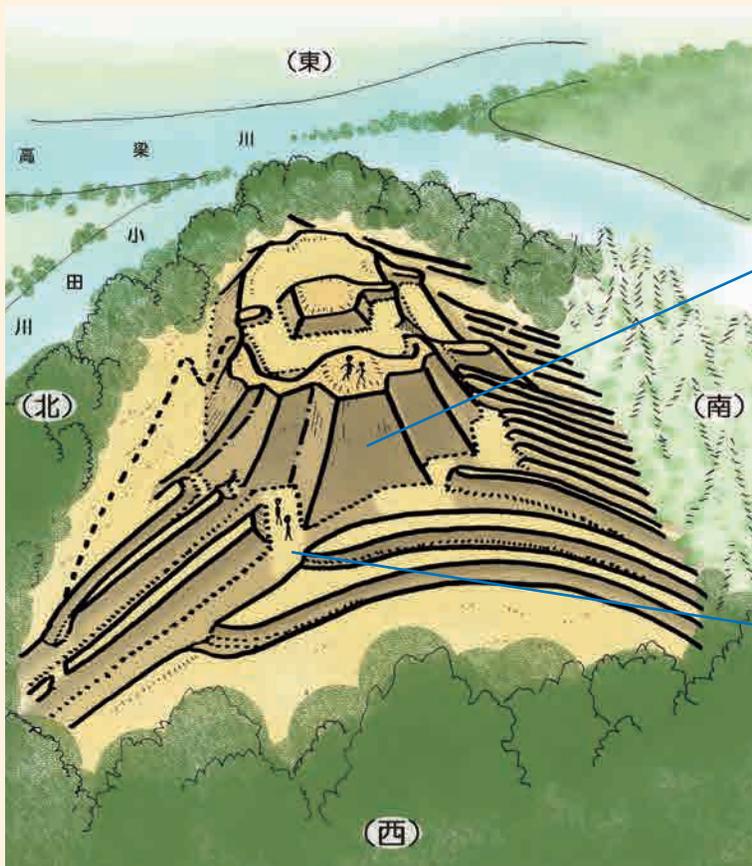
桑山南古墳群全体概略図

小田川合流点付替え事業に伴い、南山城跡の発掘調査を実施しています。この城は、備中を南北に流れる高梁川と、備前・備中を東西に結ぶ旧山陽道が交差する、交通の要衝に築かれています。丘陵の頂に兵士が駐屯する平坦地「曲輪」を設けた小規模な山城ですが、尾根を断ち切るように掘られた「堀切」や、南斜面一帯に設けられた「畝状堅堀群」など、様々な防御が凝らされた城でもあります。こうした施設は、長い年月の間に埋もれていましたが、積もった土砂を取り除くことによって、当時の城の姿が次第に明らかになってきました。

写真①は、高さ約6mもある崖で、下側より上側の方が急な傾斜になっています。これは、敵が侵入できないよう、曲輪周囲の斜面を切り崩してつくったもので、「切岸」と呼んでいます。ここまで攻め込んだ敵の兵士は、切岸の上から城兵の攻撃にさらされることとなります。写真②は、切岸の下に設けられた長方形の平坦地で、広さは約10m×3.5mあります。斜面を大規模に削り込んでつくった平坦地に到達した敵兵を、東と南にそそり立つ切岸の上から攻撃できるように工夫されており、これを「横矢がかり」と呼んでいます。

5月25日・26日の現地説明会に参加された約530名の方々には、こうした数々の工夫を目の当たりにして、その守りの固さを実感していただきました。

南山城については、当時の文献や確かな伝承が残っていないため、いつ、誰が築いたのか分かっていませんが、この地がかつて戦乱の舞台となったことを雄弁に物語っています。死が身近にあった戦国時代は約130年間も続きました。この時代をたくましく生き抜いた人々に思いをはせながら、南山城の解明を進めています。  
 (物部茂樹)



南山城跡 鳥瞰図 (西から)



写真① 西側の切岸 (西から)



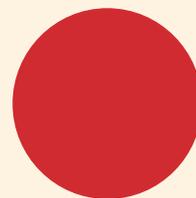
写真② 横矢がかりの平坦地 (南西から)

# 「上東遺跡出土の桃の種」が日本遺産に

## 日本遺産とは

「日本遺産 (Japan Heritage)」という言葉を知っていますか？ 「世界遺産なら聞いたことがあるけど」と言われる方も多いと思います。それもそのはず、日本遺産は平成27年度に最初の認定が行われた新しい文化財の活用のかたちなのです。これまで「点」として個別に指定・保存されていた文化遺産をストーリーとしてパッケージ化し、地域の魅力を広く発信していくことを目的としています。

このたび、岡山市・倉敷市・総社市・赤磐市の4市で申請していた「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～」が、日本遺産に認定されました。岡山県に伝わる鬼退治の伝説「吉備津彦命の温羅退治」の舞台となった県南部の文化遺産で構成されたストーリーが、地域の歴史的な魅力や特色を十分に伝えていくと評価されたのです。そしてこのストーリーを構成する文化財の一つが古代吉備文化財センター所蔵の「上東遺跡出土の桃の種」なのです。



日本遺産ロゴマーク

## 上東遺跡出土の桃の種

上東遺跡（倉敷市上東）は、現在は内陸ですが、弥生時代当時は海辺に近い集落でした。その集落から海の方に向かって延びる波止場状遺構と呼ばれる突堤が発掘調査で発見されましたが、この突堤の南側の低くなったところからなんと9,606個の桃の種が見つかりました。発見された桃の種の年代は、一緒に出土した土器の年代から弥生時代後期（1～3世紀半ばごろ）と考えていますが、種に含まれる炭素のわずかな放射線量を計測して年代を測る放射性炭素年代測定で、弥生時代後期でも後半（2世紀～3世紀前半）ではないかという結果が得られています\*。上東遺跡の桃の種は、一つの遺跡から出土した数では全国的にも群を抜いて多く、古くから桃と岡山のつながりがうかがえます。

ところで、桃の種と一緒に見つかった多種多様な出土品の中には、意図的に穴を開けた非実用の土器や絵画土器、弧帯文土器、卜骨、貨泉などがあり、まつりにかかわる遺物と考えられます。さらには、朝鮮半島との関係や交流がうかがえる土器も出土しています。上東遺跡の北方には、津寺遺跡など足守川下流域の大規模集落群があり、この付近は、弥生時代後期から古墳時代の初め頃にかけて人口と物資が集中した吉備の中核域であったと考えられます。上東遺跡は、吉備の玄関口として、瀬戸



桃の種が出土した上東遺跡の波止場状遺構（南から）



上東遺跡の桃の種

内海航路を通じて行う対外交渉や交易基地の役割を担っていたようです。まつりにかかわる品々は、航海の安全祈願に用いられたのかもしれませんが。

最近、邪馬台国<sup>やまたいこく</sup>の有力地とされる奈良県纏向遺跡<sup>まきむく</sup>から出土した桃の種の放射性炭素年代測定の結果、卑弥呼<sup>ひみこ</sup>の時代と重なる西暦135～230年である可能性が高いと発表され、卑弥呼と桃との関係がにわか  
に注目されています。古代中国では、桃は不老不死や長寿をもたらすと考えられていました。また、古代の日本でも、桃には特別な魔力があると信じられていました。上東遺跡で行われたまつりが具体的にどのような内容だったのか、大量に出土した桃との関係など興味はつきません。（金田善敬）

## コラム 津島遺跡<sup>つしま</sup>の桃の種

岡山県内の遺跡で、上東遺跡の次に桃の種が多く出土したのは津島遺跡です。津島遺跡は、岡山市街地の岡山県総合グラウンドを中心に広がる遺跡ですが、この遺跡から2,300余りの桃の種が出土しています。桃の種は、弥生時代中期の池や古墳時代中期の井戸からも出土しましたが、大量に出土したのは河道1と呼ばれる川の岸辺で、ここから弥生時代後期の土器や木製品に混じって多くの桃の種が見つかりました。この河道は、弥生時代の建築材がまとまって出土したことで有名ですが、この部材の近くでも多くの桃の種が見つかっています（写真上）。また、そこから10mほど下流でも桃の種が21個ほどまとまって発見されました（写真中）。この河道から出土した桃の種は、一緒に出土した土器から弥生時代後期後半（2世紀～3世紀前半）のものと考えられていますが、近年実施した放射性炭素年代測定では1世紀後半から2世紀前半の年代が計測されています\*。

津島遺跡内に整備した「津島やよい広場」には、桃の種と一緒に出土した建築材をもとに、写真下のような建物（シンボルモニュメント）が復元されています。この建物は、小規模ながらも高度な建築技術を用いて建てられていることから、集落の首長の住居あるいは祭殿ではないかとも言われています。この廃棄された建築材の近くで出土したまとまった数の桃の種は、この建物と何か関連があるのでしょうか？（金田善敬）



津島遺跡の河道1 建築材出土状況（南東から）



まとまって出土した桃の種



津島遺跡のシンボルモニュメント  
ここで桃を使った祭祀が行われていた？

\* 国立歴史民俗博物館 藤尾慎一郎氏らの研究グループによる上東遺跡、津島遺跡出土の桃の種各2点の放射性炭素年代測定の速報値。放射性炭素年代測定では、年代の決まった樹木年輪の測定値と比較して、暦上の年代を求める。通常は欧米産の樹木年輪との比較で十分な結果が得られるが、紀元前後のある時期は日本の資料が実際より古い年代を示すことが知られている。そのため、確からしい年代を得るためには、日本産の樹木年輪の放射性炭素年代と比較する必要がある。

## 日本列島から姿を消したムシ 井戸の中から

長さ3.5mmの黒いムシのはね。岡山市百間川原尾島遺跡の15世紀の井戸の底から発見されたものです。このはねは、他の数百点あまりの昆虫片の中に混じっていました。百間川標本と呼ぶことにします。昆虫は死ぬと体がバラバラになり、ムシ1匹が百以上の体節片に分離してしまいます。そのため、遺跡産昆虫に名前をつけるには、見つかったはねや胸・脚などが、どの昆虫のどの部位と一致するか、現生標本と比較しながら顕微鏡下で丹念に調べる必要があります。とても根気のいる仕事です。何日も観察を続けても分からないことが多く、ピッタリ一致するものを探しあてたときなど、思わずバンザイを叫びたくなるほどうれしいものです。

百間川標本が、エンマコガネに属する糞虫の左上翅であることはすぐに分かりました。はねの上部が斜めに切断状になっていて、粗大点刻を散りばめたはねの持ち主はエンマコガネ以外に考えられないからです。糞虫は、動物の糞という特別なエサ資源に依存して生活する昆虫界の変り者。糞を切り取りこねるための前脚や、糞を転がすための頭部などは種によって形が異なっていて見分けるのに役立ちますが、はねだけで種を決定することはできません。百間川標本は、はね2点と胸の部分4点の計6点だけからなる昆虫片。早速難題につきあたりました。現生標本のはねを実体顕微鏡の限界まで拡大し、上翅表面の模様を観察してみました。次に走査型電子顕微鏡を用いて上翅表面を徹底的に調べました。やってみるものです。エンマコガネの仲間の上翅表面には、種によってわずかな違いがあることが分かり、この成果をもとに百間川標本にチャレンジしてみました。

間室（はねの条溝と条溝の間の部分）がやや隆起し、小さなヤスリ目状顆粒が疎らに散布していて、電顕観察で間室に輪郭が不明瞭な多角形の鱗板があり、それがタイル状に配置される特徴をもつエンマコガネは、マルエンマコガネ *Onthophagus viduus* 以外に存在しないことが分かったのです。マルエンマコガネは、北海道・本州・四国・九州のみならず南西諸島に至るまで生息する広域分布種ですが近年衰退が著しく、琉球地方にはいるものの、日本列島で姿をみることはできなくなりました。岡山県下における本種の採集記録は、倉敷昆虫館に保存されている1969年5月12日那須敏氏採集の苦田郡上斎原村（現同郡鏡野町）から得られた標本が最も新しいもの。これより新しい記録はありません。

こうしたなか、百間川原尾島遺跡の中世後期の井戸中から見つかったムシのはねは、15世紀の頃、本種がヒトの居住域周辺に生活していたことを示す動かしがたい証拠を提供してくれます。永くヒトとともに暮らしたマルエンマコガネ。どうしていなくなってしまったのか、謎は深まるばかりです。

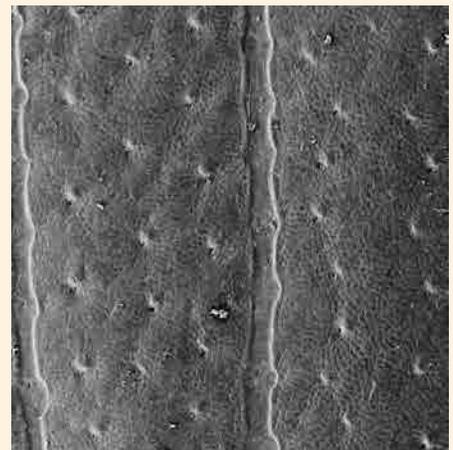
（東海シニア自然大学：森 勇一）



百間川原尾島遺跡の井戸



井戸から発見された  
エンマコガネ属の左上翅



百間川標本の電子顕微鏡写真  
（約100倍）

## 県内の発掘調査報告会「大地からの便り2018」

6月23日（土曜日）に岡山県立博物館講堂において、最新の発掘調査成果を紹介する報告会を開催しました。今回は、岡山大学と津山市・笠岡市教育委員会にご協力いただき、津雲貝塚（笠岡市）、津倉古墳（岡山市）、南山明地古墳群（倉敷市）、岡山城二の丸跡（岡山市）、津山城跡（津山市）の5遺跡について報告がありました。当日はあいにくの雨模様でしたが、118名の参加があり、皆さん熱心にメモを取りながら報告者の話に耳を傾けていました。

また、報告遺跡のうち津倉古墳出土の青銅鏡など、各遺跡の厳選した出土品を6月19日（火曜日）～7月1日（日曜日）の期間、「この逸品」として県立博物館で展示を行いました。



会場の様子



展示「この逸品」の様子

## こども体験教室・夏休み企画☆ワクワク古代体験！

5月19日（土曜日）にこども体験教室1「土器をつくる」、8月25日（土曜日）にはこども体験教室2「カゴをつくる」を生涯学習センター人と科学の未来館サイピアで開催しました。「土器をつくる」の参加者は36名で、弥生土器の説明を聞いた後、実際にオープン陶土を用いて土器をつくりました。「カゴをつくる」の参加者は28名で、縄文・弥生時代のカゴについて学んだ後、工作用のクラフトバンドでカゴをつくりました。どちらも難易度は高めでしたが、参加者は熱心に製作に取り組んでいました。

夏休み企画☆ワクワク古代体験！は7月24日（火曜日）～27日（金曜日）の4日間、生涯学習センター交流棟・人と科学の未来館サイピアにおいて開催しました。交流棟では実物の土器に触れる、弥生土器の立体パズルを組み立てる、実際の出土品から地域の歴史を学ぶなどのメニューで実施しました。一方、サイピアでは勾玉や鏡をつくるなどの古代体験メニューを用意して、実際に製作体験に取り組んでいただきました。期間中に延べ503名の方が参加され、古代の暮らしや技術に思いをはせていただけたようです。



体験教室：土器づくりに集中！



古代体験：鏡づくりに熱中！

## ◆海を渡り来た人々

赤磐市斎富遺跡は現在の山陽ICの北東にあり、山陽自動車道建設に先だって平成3～4年に、2万㎡を超える広大な面積の発掘調査を行いました。遺跡は、小さな丘陵に挟まれた、西方へなだらかに傾斜する扇状地に広がっています。この扇状地を形成した砂礫の地盤に、弥生時代中期後半(紀元前1世紀頃)に集落を作り始めて以降、盛衰はあるものの江戸時代に耕作地に変わるまで、長期にわたり人々が連綿と生活を営み続けた様子が明らかとなりました。

この遺跡を最も特色づけるのは、古墳時代(5世紀後半～6世紀)の集落で、20軒以上の竪穴住居とともに、朝鮮半島に由来する様々なものが発見されました。遺跡からは、朝鮮半島洛東江中流域産と推測される陶質土器の蓋をはじめとする搬入された土器や搬入品か在地産か判別できない土器、さらに在地産ではあるが半島の影響を強く受けた土器が数多く出土しています。また、動物の角の形を模した角杯形土器は5～6世紀の新羅・加耶地域に見られるものですが、県内では唯一の出土で、全国でも20例に満たない土器です。これら「飲食」に関わる土器に対して、「衣」に関するものに布を織るための糸を紡ぐ紡錘車がありますが、出土した算盤玉形の土製紡錘車は半島の影響と考えられています。さらに「住」として、床暖房のオンドル状の構造を持つ竪穴住居が確認されています。このように、斎富遺跡では「衣・食・住」という生活の基本要素それぞれに朝鮮半島の面影が見出せることから、海を渡り移り住んだ人々がいたとみて間違いはありません。彼らはなぜこの地に住みついたのでしょうか。

遺跡の西方約3kmには二重周濠を持つ総長349mの両宮山古墳が築造されています。この巨大な古墳が示す権勢を誇った在地の豪族と朝鮮半島の人々の間には密接な交渉関係があったのでしょう。この地の豪族が、彼らもつ先端技術の導入を望み、斎富の地に住まわせたのかもしれませんが。

斎富遺跡は、当時の海を越えた国際交流関係を紐解く、一つの鍵となる遺跡なのです。(大橋雅也)



西上空から見た斎富遺跡



角杯形土器



編集・発行

## 岡山県古代吉備文化財センター

所在地 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3  
TEL (086) 293-3211 FAX (086) 293-0142  
<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

- 交通案内 JR山陽本線庭瀬駅下車徒歩40分  
JR桃太郎線吉備津駅下車徒歩25分
- 業務時間 AM8:30～PM5:15
- 休業日 土・日曜日及び祝日、年末・年始
- 展示室の開館 AM9:00～PM5:00  
年末・年始を除き、土・日・祝日も開館しています。  
ただし、臨時に休館することがあります。

ひろげよう あふれる笑顔と 思いやり